

## <原著>東日本学園大学歯学部附属病院口腔外科における病棟開設5年間の入院患者の臨床統計的観察

著者名(日)	村瀬 博文, 宮沢 悦也, 宮田 雅代, 九津見 雅之, 平 博彦, 利根川 一郎, 舘山 佳季, 麻生 智義, 北村 完二, 斎藤 基明, 富田 喜内, 中川 徹, 秋山 幸生, 清水 浩, 江上 史倫, 和田 敏亮, 谷内 健司, 蓑輪 隆宏, 松崎 弘明, 道谷 弘之, 原田 尚也, 武田 充弘, 額賀 康之, 金沢 正昭
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	4
号	2
ページ	113-123
発行年	1985-12-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00007186/">http://id.nii.ac.jp/1145/00007186/</a>

[原 著]

東日本学園大学歯学部附属病院口腔外科における  
病棟開設5年間の入院患者の臨床統計的観察

村瀬 博文, 宮沢 悦也, 宮田 雅代,  
九津見雅之, 平 博彦, 利根川一郎,  
館山 佳季, 麻生 智義, 北村 完二,  
斎藤 基明, 富田 喜内, 中川 徹\*,  
秋山 幸生\*, 清水 浩\*, 江上 史倫\*,  
和田 敏亮\*, 谷内 健司\*, 蓑輪 隆宏\*,  
松崎 弘明\*, 道谷 弘之\*, 原田 尚也\*,  
武田 充弘\*, 額賀 康之\*, 金沢 正昭\*

東日本学園大学歯学部口腔外科第2講座

\*東日本学園大学歯学部口腔外科第1講座

(主任: 村瀬 博文 教授)

\* (主任: 金沢 正昭 教授)

Clinical and Statistical Observations on the Inpatients over the  
Past 5 Years in the Department of Oral Surgery,  
Higashi-Nippon-Gakuen University School of Dentistry.

Hirofumi MURASE, Etsuya MIYAZAWA, Masayo MIYATA,  
Masayuki KUTSUMI, Hirohiko TAIRA, Ichiro TONEGAWA,  
Yosiki TATEYAMA, Tomonori ASO, Kanji KITAMURA,  
Motoaki SAITO, Kinai TOMITA, Tōru NAKAGAWA\*,  
Yukio AKIYAMA\*, Hiroshi SHIMIZU\*, Fuminori EGAMI\*,  
Toshisuke WADA\*, Kenzi YATHI\*, Takahiro MINOWA\*,  
Hiroaki MATSUZAKI\*, Hiroyuki MITHIYA\*, Naoya HARADA\*,  
Motohiro TAKEDA\*, Yasuyuki NUKAGA\*, and Masaaki KANAZAWA\*

Second Department of Oral Surgery, School of Dentistry,  
HIGASHI-NIPPON-GAKUEN UNIVERSITY

\*First Department of Oral Surgery, School of Dentistry,  
HIGASHI-NIPPON-GAKUEN UNIVERSITY

(Chief : Prof. Hirofumi MURASE)

\* (Chief : Prof. Masaaki KANAZAWA)

### Abstract

The outpatient clinic of Higashi-Nippon-Gakuen University School of Dentistry was opened in December, 1978 and the inpatient division was established in June, 1980.

The total number of inpatients was 290 and that of outpatients was 3117 up till May, 1985.

Clinical and statistical observations of inpatients over the past 5 years was analysed. The number of inpatients showed a yearly increase up till 1983.

The distribution of diseases of the inpatients is as follows: Cyst disorders (60 cases; 20.7%), tumors (58 cases; 20.1%), facial malformations and jaw deformities (46 cases; 15.9%), inflammatory cases (19 cases; 6%), atrophic alveolar ridges (14 cases; 4.8%), traumata (25 cases; 8.6%), and others (56 cases; 17.9%).

It is concluded that number of cystic and tumor diseases accounted for a large percentage of the total number of inpatients.

**key words** : Analysis of inpatients, clinical and statistical observations

## 緒 言

わが国における歯科教育機関は、従来は大都市が中心として発展してきたが、近年になり地方都市においても、歯学部の増設が要望され、歯学教育機関が新設され、本学もその機運に基づいて、北海道では唯一の私立大学歯学部として昭和53年4月に増設され、同年12月に歯学部附属病院が開院したが、病棟診療は、それより1年半余り遅れて、昭和55年6月に24床で、その業務を開始した。

本学歯学部附属病院病棟部門も昭和60年5月で満5ケ年を経過するまでとなり、その間に、口腔外科外来には3,117名の新来患者が受診し、そのうち入院患者は290名であった。そこで、今回、われわれは、歯学部口腔外科の動態を知るために、現在までの5年間の入院患者を集計し、臨床統計的観察を行った。

## 研究対象

昭和55年6月から昭和60年5月までの5年間に東日本学園大学歯学部附属病院口腔外科外来に来院した新来患者は3,117名であったが、そのうち入院加療を必要とした患者は290名で、新来患者総数に対して約9.3%であった。

今回は、入院患者の290名を対象として、年度別、診断別の分類などの臨床統計的な観察をおこなった。なお同一症例で数回の入院を繰り返している場合には、各回毎に1例とした。

## 研究成績

1. 口腔外科外来新患者数と入院患者数との関係 (表1)

口腔外科外来新患者総数に対する入院患者総数の5年間平均の比率は約9.3%であった。病棟開設初期の昭和55年の入院患者数は少なく、昭和55年外来新患者総数との比率は6.3%で、昭和56年以降は徐々に増加傾向を認め、入院患

者の通年平均は57.8名, 19.9%であった。

2. 入院患者と年齢別分布と性別 (表2)

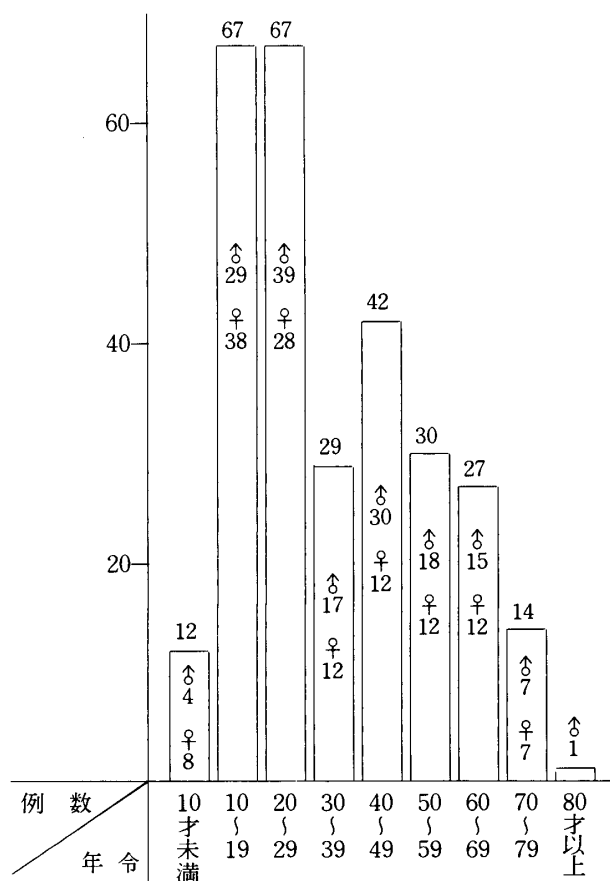
年齢別分布では、10才代および20才代が最も多く、全体の49.9%を占め、40才代がこれについて多かった。

性別では、20才代および40才代で男性が多く、10才代で女性が若干多く、平均すると男性55.8%, 女性44.2%であった。

表1 年別外来新患者数及び入院患者数 (昭和55年6月~昭和60年5月)

年	55	56	57	58	59	60	合計
外来	349	630	650	660	661	167	3,117
入院	22	60	48	60	77	23	290
%	6.3	9.5	7.3	9.1	11.6	13.8	9.3

表2 年齢別症例数



3. 年度別疾患数 (表3)

年度別疾患数では、昭和55年度は、奇形、外傷疾患、炎症疾患、嚢胞疾患、腫瘍疾患、顎変形症、顎堤萎縮、歯牙疾患およびその他の8疾患22名で、昭和56年度は、同上疾患に血液疾患を加えた9疾患60名で、以後、昭和57年度は、8疾患47名、昭和58年度は、11疾患61名、昭和59年度は、9疾患78名、昭和60年度は、7疾患23名となっており、特に嚢胞疾患、腫瘍疾患、顎変形症などの疾患では、年度ごとに入院患者数の増加が認められた。

4. 各種疾患の内訳

1) 奇形 (表4)

奇形は6例(2.1%)で、男女比は1:1で男女同率であり、変治唇裂1例で男性、口蓋裂5例で男女比は1:1.5で女性に多かったが、2例は二次症例であった。

奇形患者全体の入院日数は135日間で、患者平均入院日数は、22.5日間であった。

奇形の手術は全例におこなわれ、口唇修正術1例、口蓋形成術3例、咽頭弁形成術2例であった。

2) 外傷疾患 (表5)

外傷はすべてが、新鮮二次症例で、軟組織外傷は、すべて処置されているため、軟組織外傷は除外した25例(8.6%)で、歯牙外傷と顎、顔面骨々折に大別すると、歯牙外傷は4%で、顎、顔面骨骨折は96%で、そのほとんどが、顎、顔面骨骨折であった。男女比は1.7:1で男性に多い傾向があった。顎、顔面骨骨折のうち、下顎骨骨体骨折の単独骨折が9例(36%)で、男女比は2:1で男性に多く、下顎骨骨体骨折と他部骨折を共なったものは10例(40%)で、男女比は1.5:1で男性に多く、その他の骨折は表5のように男性に多い傾向があった。

外傷全体の入院日数は660日間で、入院患者平均の入院日数は約26.4日間であった。

下顎骨骨体骨折の全患者の入院日数は261日

表3 年度別疾患数

疾患名 年	奇形	外傷	炎症	嚢胞	腫瘍	顎関節	顎変形症	神経	血液	顎堤萎縮	粘膜疾患	他 歯 疾 患	計
55	3	2	4	5	3		2			2		1	22
56	2	3	1	17	11		7		1	4		15	61
57		8	4	8	7		6			3		9	45
58	1	3	1	11	18	1	10	1		1	1	13	61
59		7	6	17	13	4	15	1		4		10	77
60		2	3	2	6		7					4	24
計	6	25	19	60	58	5	47	2	1	14	1	52	290
	2%	8.6%	6.6%	20.7%	20.1%	1.7%	16.2%	0.7%	0.3%	4.8%	0.7%	17.9%	

表4 奇形

	例数	男	女	入院日数	平均入院日数
唇裂	1	1		12日	12日
口蓋裂	5	2	3	123日	24.2日
計	6	3	3	135日	22.5日

表5 外傷性疾患

	例数	男	女	入院日数	平均入院日数
下顎骨体骨折	9	6	3	261	29
下顎骨体骨折 他部骨折	10	6	4	488	48.8
上顎骨骨折他 部骨折	2	1	1	64	32
その他の部位 の骨折	3	3		104	34.7
歯牙外傷	1		1	4	4
小計	25	16	9	660	26.4

で、患者平均入院日数は約29.0日間であった。また下顎骨骨体骨折および関節突起骨折の全患者の入院日数は402日間で、患者平均入院日数は約44.6日間であった。その他の部位の顎、顔面骨骨折全患者の入院日数は328日間で、患者平均の入院日数は41日間であった。

外傷の原因(表6)は、交通事故16例、スポーツ、転落各3例、暴力2例、その他1例であった。また処置は、観血的整復固定術10例、非観血的整復固定術15例であった。

### 3) 炎症疾患(表7)

炎症、特に歯性感染症は19例(6.6%)で、男女比は2.2:1で男に多い傾向がみられた。

炎症を歯性上顎洞炎、顎骨周囲炎、顎骨炎、歯肉炎、智歯周囲炎に分類した。

表6 原因

原因	例数
交通事故	16
転落	3
スポーツ	3
暴力	2
その他	1

処置法

処置法	件数
観血的整復固定術	10
非観血的整復固定術	15

表7 炎症

	例数	男	女	入院日数	平均入院日数
顎骨周囲炎	5	3	2	129	25.8
顎骨炎	4	3	1	104	26
歯性上顎洞炎	5	3	2	83	16.6
歯肉炎	3	2	1	39	13
智歯周囲炎	2	2		18	9
計	19	13	6	373	19.6

歯性上顎洞炎は5例で、全体の26%を占め、男女比は1.5:1で、男性が多かった。

顎骨周囲炎には、口腔底蜂窩織炎、頬部膿瘍、オトガイ部膿瘍、顎骨骨膜炎が含まれており、5例で全体の26%を占め、男女比は1.5:1と歯性上顎洞炎同様に男性に多くなっていた。

顎骨炎は4例で、21%を占め、男女比は3:1と男性に多かった。

歯肉炎は3例で、16%を占め、男女比は2:1で男性に多かった。

智歯周囲炎は2例で、11%を占め、2例とも男性であった。

炎症全体の入院日数は373日間で、入院患者平均の入院日数は約19.6日間であった。

歯性上顎洞炎の全体の入院日数は83日間で、平均入院日数は約17日間であった。顎骨周囲炎全体の入院日数は129日間で、平均入院日数は約26日間であった。顎骨炎全体の入院日数は104日間で、平均入院日数は約26日間であった。

4) 嚢胞疾患 (表8)

嚢胞疾患は60例(19.3%)あり、男女比は1.7:1で男性にやや多く、顎骨内嚢胞55例(91%)と軟組織内嚢胞5例(9%)に分類され、男女比は顎骨内嚢胞1.7:1で男性にやや多く、軟組織内嚢胞は1:4で女性に多い傾向が認められた。

顎骨内嚢胞を分類すると、歯原性嚢胞31例(55.4%)で、男女比は1.8:1で、男性に多く、

非歯原性嚢胞29例(51.6%)で、男女比は1.1:1で、ほぼ男女比は同率であった。

歯原性嚢胞には歯根嚢胞が15例(26.8%)で最も多く、男女比は2.8:1で男性に多く、癒胞性歯嚢胞は12例(21.4%)で、男女比は2:1で男性に多く、残留嚢胞は4例(7.1%)で、男女比は1:3で女性に多かった。

非歯原性嚢胞には、術後性上顎嚢胞21例(72.4%)で最も多く、男女比は1.6:1で男性に多かった。顔裂性嚢胞3例(10.3%)で、男女比は1.4:1で男性に多い傾向があった。

軟組織内嚢胞は停滞嚢胞4例(7.1%)で、男女比は1:3で女性に多く、側頸嚢胞は1例(1.8%)で女性であった。

嚢胞疾患全体の入院日数は789日間で、入院患者の平均入院日数は13.2日間であった。

顎骨内嚢胞患者の全体の入院日数は740日間で、入院患者平均の入院日数は13.5日間であり、軟組織内嚢胞患者の全体の入院日数は49日間で、入院患者平均の入院日数は9.8日間であった。

5) 腫瘍疾患 (表9)

腫瘍は58例(20%)であり、男女比2:1で男性に多く、さらに分類すると、非歯原性良性腫瘍20例(34.5%)で、男女比1:1.2で女性にやや多く、歯原性良性腫瘍10例(17.2%)で、男女比1:1で男女同率となっている。悪性腫瘍27例(46.6%)で男女比12.5:1で男性に著

表8 嚢胞性疾患

		例数	男	女	入院日数	平均入院日数	
顎骨内嚢胞	歯原性嚢胞	歯根嚢胞	15	11	4	162	10.8
		癒胞性嚢胞	12	8	4	146	12.2
		残留嚢胞	4	1	3	67	16.8
	非歯原性嚢胞	術後性上顎嚢胞	21	13	8	340	16.2
		顔裂性嚢胞	3	1	2	25	8.3
軟組織嚢胞	停滞嚢胞	4	1	3	36	9	
	側頸嚢胞	1		1	13	13	
		60	35	25	789	13.2	

表9 腫瘍疾患

		例数	男	女	入院日数	平均入院日数
良 性	歯原性良性腫瘍	10	5	5	186	18.6
	非歯原性良性腫瘍	20	9	11	451	22.6
悪 性	悪性腫瘍	27	25	2	1,618	59.9
	転移癌	1		1	46	46
		58	39	19	2,301	39.7

表10 悪性腫瘍手術

	例数
上顎腫瘍切除術	3
下顎腫瘍切除術	6
他部位腫瘍切除術	9
頸部廓清術	9
浅側頭動脈カテーテル挿入	6
腸骨移植	1

明に多く、転移癌1例(1.7%)で女性であった。

腫瘍患者全体の入院日数は2,301日間で、患者平均入院日数は39.7日間であった。分類別にみると、非歯原性良性腫瘍患者全体の入院日数は451日間で、患者平均入院日数は22.6日であった。歯原性良性腫瘍患者全体の入院日数は186日間で、患者平均入院日数は18.6日間であった。悪性腫瘍患者全体の入院日数は1,618日間で、患者平均入院日数は59.9日間と最も長く、転移癌患者は1例で、入院日数は46日間であった。

悪性腫瘍手術では、表10の様に、上顎切除術3例、下顎切除術6例、他部位切除術9例、頸部廓清術9例、浅側頭動脈カテーテル留置6例、腸骨移植1例であった。

悪性腫瘍27例は、前記の様に同一症例で数回入院を繰り返した場合も各回毎に1例としており、その内訳は部位別(表11)では、上顎歯肉2例、下顎歯肉7例、頬粘膜4例、舌1例、口腔底1例、上顎洞2例であり、組織別では、扁平上皮癌14例、腺癌2例、悪性黒色腫1例であった。

#### 6) 顎関節疾患(表12)

顎関節疾患は5例(1.7%)で、男女比は1:1.5で、男女比は女性にやや多かった。このうち顎関節脱臼1例(20%)で、男性、顎関節炎1例(20%)で、女性、顎関節強直症2例(40%)で、男女各1例、顎関節変形症1例(20%)で、女性であった。

顎関節疾患患者全体の入院日数は209日間で、患者平均入院日数は41.8日間であった。

表11

部位別	例数	組織型別	例数
上顎歯肉	2	扁平上皮癌	14
下顎歯肉	7	腺癌	2
頬粘膜	4	悪性黒色腫	1
舌	1		
口腔底	1		
上顎洞	2		
計	17		

表12 顎関節疾患

	例数	男	女	入院日数	平均入院日数
顎関節脱臼	1	1		63	63
顎関節炎	1		1	8	8
顎関節強直症	2	1	1	102	51
顎関節変形症	1		1	36	36
		2	3	209	41.8

#### 処置法

徒手整復固定	1
消炎療法	1
顎関節授動術	2
顎関節頭形成術	1

処置法は、顎関節授動術2例、顎関節頭形成術1例、消炎療法1例、脱臼整復固定術が1例であった。

#### 7) 顎変形症(表13)

顎変形症は46例(15.9%)で、男女比は1:2.3で女性に多かった。このうち、下顎前突症は32例(69.9%)と最も多く、男女比は1:4.3で、

表13 顎変形症

	例数	男	女	入院日数	平均入院日数
下顎前突症	32	6	26	958	29.9
上顎前突症	2		2	57	28.5
交叉咬合	4	1	3	134	33.5
開咬症	5	5		194	38.8
顔面非対称	2		2	17	8.5
上顎発育不全	1	1		23	23
	46	13	33	1,383	30.1

手術法

下顎矢状分割法	20
上顎前方移動術 (Le Fort I型)	1
オトガイ形成術	4
全歯槽部骨切術	4
前歯部歯槽部骨切術	20
その他	2

著明に女性が多く、次いで開咬症は5例(10.9%)で、すべて男性であった。交叉咬合は4例(8.7%)で、男女比は1:3で女性に多く、顔面非対称は2例(4.3%)で、すべて女性で、上顎前突症2例(4.3%)で、男女比は1:3で女性に多く、上顎発育不全は1例(2.2%)で、男性であった。

顎変形症患者全体の入院日数は1,383日で、患者平均入院日数は30.1日間であった。またその内訳は、下顎前突症全体の入院日数は958日間で、患者平均入院日数は29.9日間、開咬症全体の入院日数は194日間で、患者平均入院日数は38.8日間であった。交叉咬合全体の入院日数は134日間で、患者平均入院日数は33.5日間であった。

顎変形症の手術(表13)は47例で、下顎矢状分割術20例、前歯部歯槽部骨切り術20例、オトガイ形成術4例、全歯槽部骨切り術4例、上顎前方部移動術1例、その他2例であった。

8) 顎堤萎縮(表14)

顎堤萎縮は14例(4.2%)で、男女比は1:2.5

表14 顎堤萎縮

	例数	男	女	入院日数	平均入院日数
顎堤萎縮	14	4	10	361	25.8

表15 歯牙疾患, その他

	例数	男	女	入院日数	平均入院日数
歯牙疾患	45	23	22	388	8.6
その他	6	1	5	59	9.8

麻酔法	全麻	33
	局麻	15
	N.L.A	3

で、女性に多かった。

顎堤萎縮患者全体の入院日数は361日間で、患者平均入院日数は、25.8日間であった。

手術は全例に植皮をともなった顎堤形成術をおこなわれ、骨移植をおこなった例はなかった。

9) 歯牙疾患およびその他(表15)

歯牙疾患およびその他は51例(17.6%)で、男女比は1:1.3で、やや女性が多かった。

歯牙疾患は、多数歯齲蝕、根尖性歯周炎、埋伏歯があり、45例(88.2%)で、男女比は1:1で同率であった。その他は、骨吸収不全、頬部癍痕などがあり、6例(11.8%)で、全例女性であった。これらの入院患者は、何らかの合併症を有しており、主な合併症は、脳性麻痺、精神薄弱、テンカン、アレルギー疾患、狭心症、脳卒中などであった。

歯牙疾患およびその他の患者全体の入院日数は447日間で、患者平均の入院日数は8.8日間であった。

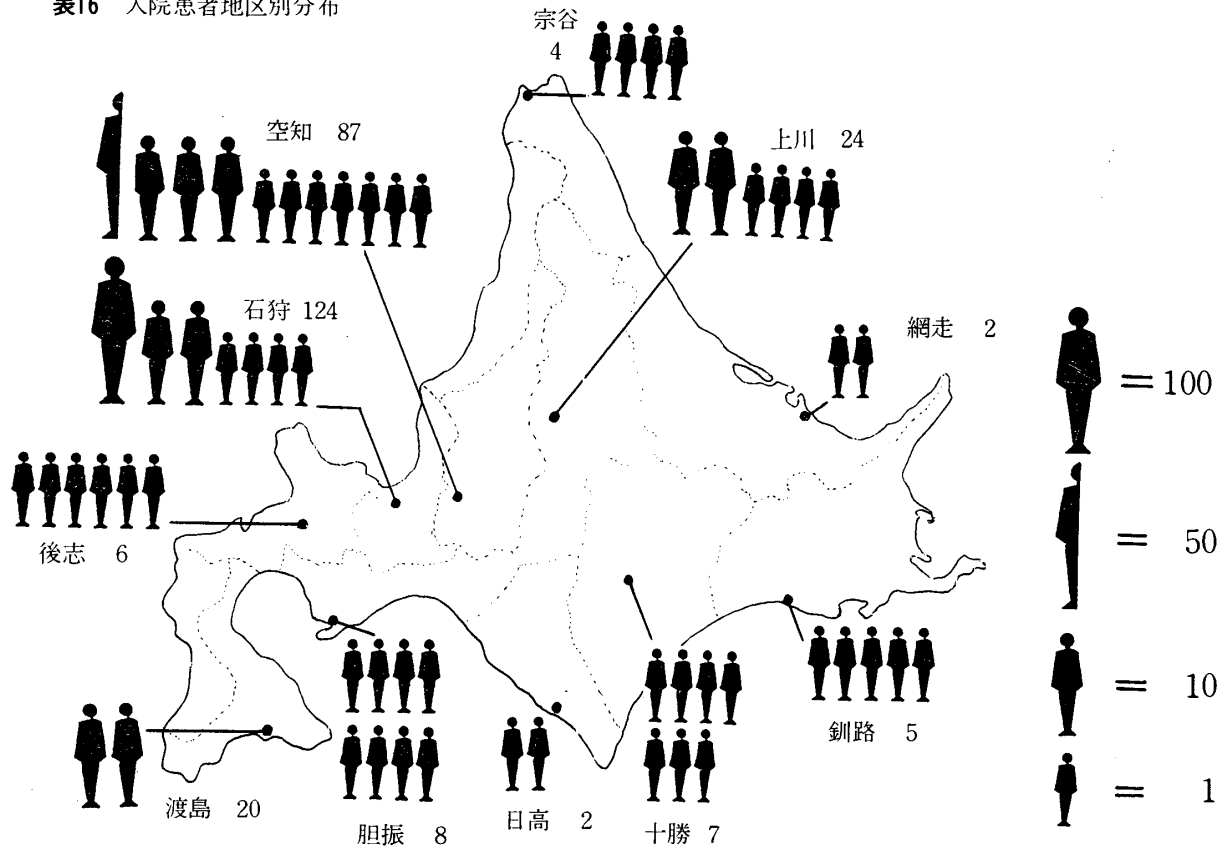
処置における麻酔法は、全麻33例、局麻15例、N.L.A 3例であった。

6. 入院患者の居住地別分布(表16)

入院患者の居住地別分布をみると、石狩、空知管内が最も多く、全体の73%を占め、地域医療施設としての特徴を示しており、渡島、胆振、十勝、釧路等の全道多岐にわたって患者の居住



表16 入院患者地区別分布



地分布がみられた。

7. 入院患者の紹介診療科 (表17)

入院患者の紹介総数は211例(72.8%)で、ほとんどが紹介によるものであり、その内訳は歯科134名(46.4%)、医科38名(13.1%)、その他39名(13.5%)であった。医科における紹介

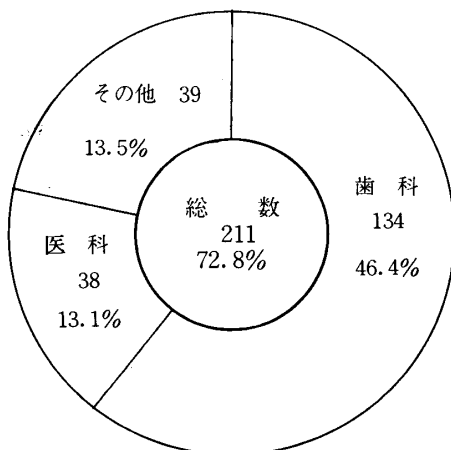
は外科、整形外科、内科よりの紹介が多く、その他の内容については、身障者施設よりの紹介および院内他科よりの紹介が、その大部分をしめていた。

考 察

東日本学園大学歯学部は昭和53年開設されたが、同附属病院病棟部門の開設は昭和55年6月に、24床をもって入院業務を開始し、現在に至っている。そこで口腔外科入院患者の動態を調査するため、昭和55年6月より昭和60年5月までの5年間について入院患者の臨床統計的分析を試みた。

入院患者の動態を年度別に見ると、開設以降、徐々に増加傾向がみられるが、昭和57年に入院患者数の低下がみられ、これは昭和56年秋の石狩川水害のためによる影響と思われる。しかしながら外来新患者数は56年以降600名をこえて、漸次増加傾向が見られた。

表17 紹介診療科



外来新患者数との割合でも同様に、その比率は漸次増加傾向で、昭和55年6.3%から昭和60年13.6%と最高比率を示し、平均9.3%であった。

また紹介入院患者は入院患者総数の72.8%を占め、外来新患者総数の6.8%を示した。紹介医は歯科医が最も多く、次いで医科で、その内訳は外科、整形外科、内科が主で、その他として身障者施設等からの紹介があり、このことより、地域における当科の立場が認識されていることと思われる。

入院患者数と外来新患者総数との関係を各施設よりの報告でみると、鹿児島大学歯学部第2口腔外科<sup>1)</sup>が16.1%で最も高く、表18のごとくで、その他の施設からの報告では12%~3%の範囲に入り、5%~3%が多くみられた。当科の入院比率はこれらの施設と比較すると多少高い比率であった。しかし、これらの施設の報告

年代、地域性の影響、治療方針、手術適応の違い、地域の2次的または3次的医療機関など、諸条件が異なり、一概に比較することはできない。

年齢、性別構成をみると男性160名(55.2%)、女性130名(44.8%)、計290で、やや男性に多く、各年代別構成でも男性の入院がやや多い傾向が認められたが、10才以下では、逆に女性の入院がやや多い傾向となっていた。また、年齢別では10才代、20才代がピークで、全入院患者数の約半数を占め、次いで40才代が続いていた。

次に診断別についてみると、嚢胞20.6%で最も多く、次いで腫瘍20%、歯牙疾患およびその他17.5%、顎変形症15.7%、外傷8.6%で、他施設からの報告と比較すると炎症疾患が20%以上を占めている施設が多く、口腔外科領域では、受診頻度の高い疾患であるが、当科における炎症疾

表18 各施設よりの報告 (1961年~1985年)

年度	発表施設	期間	入院総数 (人)	奇形 (%)	外傷 (%)	炎症 (%)	腫瘍 (%)	嚢胞 (%)	その他 (%)
1961	新潟大学医学部歯科	5年	297		17.6	46.4	30.9		5.1
	岡山大学医学部歯科口腔外科	5年	716	14.1	8.0	40.2	44.3		3.2
1962	国立金沢病院歯科口腔外科	6年	507			41.1	9.0	29.6	
1969	関東労災病院歯科	10年	502		32.8	37.0	19.4		6.8
1970	尾道総合病院歯科口腔外科	5年	561		14.8	40.7	18.7	18.7	5.0
1971	岩手医科大学歯学部口腔外科	5年	757	20.7	13.1	22.9	16.6	15.7	
	北海道大学歯学部口腔外科	3年	557	32.0	17.0	12.0	12.0	12.0	
	国立東京第1病院歯科口腔外科	10年	490	18.0	10.0	26.2	38.0		8.8
1973	三重大学医学部口腔外科	12年	896		21.5	35.7	12.9	20.4	9.2
	佐久総合病院歯科口腔外科	6年	222	23.4	14.4	21.1	8.9	10.8	11.7
	大阪労災病院口腔外科	10年	1,074	61.3	13.7	9.9	7.2	4.1	3.9
1975	国立金沢病院歯科口腔外科	11年	1,181	3.0	4.0	46.0	14.0	22.0	16.5
	北海道大学歯学部口腔外科	8年	1,410	34.3	18.4	9.5	36.0	10.8	6.0
1977	福岡大学病院歯科口腔外科	3年	156	9.6	19.9	35.9	7.1	8.3	19.2
1978	慶応義塾大学医学部歯科口腔外科	10年	948	7.3	14.1	20.8	13.9	25.4	6.6
1980	名古屋第1赤十字病院歯科口腔外科	4年8月	382	33.0	14.0	17.0	19.0	13.0	1.0
1981	長崎大学歯学部第1口腔外科	3年6月	239	13.0	9.6	26.8	17.1	20.9	
1983	岐阜歯科大学口腔外科	7年	1,318	3.1	12.7	32.5	9.3	21.3	21.1
1985	東日本学園大学歯学部口腔外科	5年	290	2.0	8.6	6.6	20.2	20.7	17.9

患の占める比率は低かった。

嚢胞疾患は、炎症と同様に口腔外科領域では受診頻度の高い疾患であり、当科においては、全疾患のうち第1位であり、他施設と同様であった。

外傷疾患については、当科は低率であり、上顎骨骨折に比べ下顎骨骨折が極めて多く、下顎骨骨折20例(80%)で、その内、下顎骨骨体骨折が17例(68%)を占めている。また骨折の原因として、交通事故が64%と最も多く、最近の外傷の特長をしめしている。

腫瘍疾患については、他施設より高率であり、当科における内訳は、良性腫瘍51.7%、悪性腫瘍48.3%であった。悪性腫瘍では癌腫が82.4%を占め、肉腫の症例はなかった。

奇形および顎変形症については、両者で17.8%を占めている。奇形の占める比率は2.1%と低率であり、当地方の周囲人口が少なく、大都市圏と異なり、老人人口が多く、出産人口層が少なく、出生率が低いことによるものと推測される。また顎変形症の占める比率は15.7%であり、下顎前突症症例が最も多く、次いで開咬症症例となっており、その手術は20才前後の女性に集中する傾向を示していた。

歯牙疾患およびその他については、17.5%を占め、他施設より高率となっており、10才代、20才代が多く、歯牙疾患およびその他の内の55%を占めており、その大部分が身障者施設からの紹介であった。また循環器疾患患者等の歯牙治療のために医科より紹介も、歯牙疾患およびその他の内の15.7%を占めていた。

入院日数を疾患別にみると、悪性腫瘍の入院日数が最も多く、当然のことと思われる。また次いで外傷、特に複雑骨折例では入院日数は長くなっている。その他の疾患はほぼ同様に20日前後の入院日数が多かった。

今後、歯科医院、医科医院の増加とともに、紹介による入院患者の増加が考えられ、当科に

おける治療内容についても、さらに特徴づけるものと思われる。

## 結 論

東日本学園大学歯学部附属病院病棟が開設された昭和55年6月より昭和60年5月までの5年間に、口腔外科にて入院加療を行った290名の患者の動態を検討した結果、口腔外科における主要な疾患が多く含まれ、口腔外科臨床の存在意義を十分に意味づけられたものと考えられた。

また当科における診療データをさらに増やし、統計的観察を行い、患者動向を分析し、適切な診療体制を作ってゆきたいと考えている。

本論文の一部は第3回、東日本学園歯学会学術大会(1985年3月)において発表した。

## 文 献

- 1) 田中 勉, 太田一男, 三村 保, 大枝直樹, 椎原 保, 岡野眞法, 吉嶺真一郎: 鹿児島大学歯学部第2口腔外科講座開設後1年間の患者の臨床統計, 日口外誌, 29; 726-731, 1983.
- 2) 普天間朝義, 斎藤利夫, 手島貞二: 当科における1年間の入院患者の臨床統計的観察(抄), 口科誌, 30; 332, 1981.
- 3) 服部嘉彦, 桑原春子, 日比五郎, 河合 男: 名古屋保健衛生大学医学部歯科口腔外科における約4カ年の入院外来の臨床的統計観察(抄), 日口外誌, 23; 339, 1977.
- 4) 吉岡敏雄, 岡 光夫, 磯田洋子, 山崎勝栄, 神成一, 桑原直矢: 新潟大学附属病院歯科における5年間の入院患者の臨床的観察(抄), 口外誌, 7; 195-196, 1961.
- 5) 西嶋克己, 河本健行, 中谷昌慶, 宇根敏行, 谷 幸治, 福島範明: 最近5カ年間にわが教室の入院患者の臨床統計的観察(抄), 口外誌, 7; 196, 1961.
- 6) 小林一郎, 高木治洋, 横井宏彰, 若木 伸: 過去6ケ年間にわける国立金沢病院歯科口腔外科系入院患者の統計的観察(抄), 口外誌, 8; 221, 1962.
- 7) 岡野光雄, 舩松克彦, 奥野喜津子, 飯塚克己, 中久木大見: 関東労災病院における最近10年間の入院患者の臨床統計的観察(抄), 日口外誌, 15; 252, 1969.

- 8) 大城信子, 作田正義, 下里党弘, 宮崎 正, 川勝賢作: 昭和43年度における入院患者 561 名の症例分析(抄), 日口外誌, 16 ; 251, 1970,
- 9) 藤岡幸雄, 大橋 靖, 関山三郎, 工藤啓吾, 小川邦明, 玉木功一, 本間隆義, 小笠原佑吉, 鈴木孝三, 青村修明, 中里紘一, 柳沢 融: 岩手医科大学歯学部口腔外科創設後 5 年間に於ける入院患者の臨床統計的観察, 口科誌, 20 ; 592-601, 1971.
- 10) 富田喜内, 河村正昭, 長谷川土郎, 島本昌幸, 南波宏行, 藤森敏昭, 村上忠功: 北海道大学歯学部附属病院における開院 3 年間の入院患者の臨床統計的観察(抄), 口科誌, 20 ; 285, 1971.
- 11) 佐藤伊吉, 五十嵐盛志, 広橋 彬: 過去 10 年間に於ける入院加療患者についての統計的観察(抄), 口科誌, 285-286, 1971.
- 12) 田島時博, 佐藤一郎, 川原田幸三, 榎山正徳, 川合一, 松崎妙信, 古橋正史, 大橋隆道, 古田正彦, 森喜郎, 山口淳一: 三重県立大学医学部附属病院口腔外科入院患者の動態(抄), 日口外誌, 19 ; 659, 1973.
- 13) 船山忠夫, 児玉俊治, 小川照男, 白田篤伸: 佐久総合病院歯科口腔外科における開設後 6 年間の入院患者 222 症例の臨床統計的観察(抄), 日口外誌, 19 ; 659, 1973.
- 14) 本田光徳, 須川 亮, 端山真次: 大阪労災病院口腔外科開設後 10 年間に於ける入院患者の臨床統計的観察, 日口外誌, 20 ; 347-353, 1974.
- 15) 乾 晃: 国立金沢病院歯科口腔外科における入院患者の 11 年間の統計的推移(抄), 日口外誌, 21 ; 913, 1975.
- 16) 富田喜内, 河村正昭, 福田 博, 半田允克, 中村順三, 半田幸雄: 北海道大学歯学部附属病院における 8 年間の入院患者の臨床統計的観察(抄), 日口外誌, 21 ; 913, 1975.
- 17) 山口修平, 金沢喜美, 中山隆雄, 佐藤強志, 都 温彦: 福岡大学病院歯科口腔外科開設後約 3 年間に於ける入院患者の臨床統計的観察(抄), 日口外誌, 23 ; 609, 1977.
- 18) 藤野雅美, 中村保夫, 酒泉和夫, 朝浪惣一郎, 永井哲夫, 富田汪助, 財満詔次, 竹内博之, 逢坂文博: 慶応義塾大学附属病院歯科口腔外科における最近 10 年間の入院患者の臨床統計的観察(抄), 口科誌, 27 ; 566, 1978.
- 19) 北山誠二, 池田憲昭, 蜂矢裕司, 大辻 清, 梅村長長生: 名古屋第一赤十字病院歯科口腔外科における過去 4 年 8 カ月の入院患者についての総括, 愛院大誌, 18 ; 41-44, 1980.
- 20) 佐々木弘人, 太田 寛, 江頭茂樹, 高久和也, 鶴素子, 篠原慶治, 松谷和彦, 山部一実, 佐野和生, 許斐義彦, 奥村英彦, 井口次夫, 佐々木元賢: 長崎大学医学部歯科口腔外科(顎顔面) 第 2 診療科 3 年 6 ヶ月間に於ける入院患者の臨床統計的観察(抄), 口科誌, 30 ; 354, 1981.
- 21) 磯貝昌彦, 藤本和久, 亀谷明秀, 内藤講一, 北島正, 山上隆裕, 築谷康二, 中井道明, 小林一光, 堀田 恒: 岐阜歯科大学附属病院口腔外科入院患者の最近 7 年間の臨床統計的観察, 日口外誌, 31 ; 116-125, 1985.